

特集1 / 幸福についての公共研究—千葉大学公共学会講演会

幸福公共哲学とその科学的展開

—ポジティブ心理学と政治経済学

千葉大学人文社会科学研究科教授

小林 正弥

幸福の公共研究

今日のテーマは「幸福についての公共研究—政治経済学における展開」です。私は、公共哲学の観点から幸福についての考え方や研究成果をお話します。

公共哲学というのは「広く人々に共有される考え方」で、かつ「望ましいと考えられる公共性の実現を目指す考え方」です。この大学には公共哲学のような思想に関する研究者だけでなく、経験的・実証的に科学的な研究をされている先生方もいらっしゃいます。そこで思想的な研究と科学的ないし実証的な研究という両方のアプローチを統合するかたちで研究を進めていくことを大きなプロジェクトの方針としています。そのような新しい研究の分野や考え方のことを公共研究と言っています。

公共研究は千葉大学で私たちが開拓した新しい学問のアプローチです。私は地球環境福祉研究センターの長をしていて、このセンターはグローバルな環境や福祉、そして平和を課題にしています。私と石戸光先生や小川哲生先生で新しく始めたプロジェクトでは幸福というテーマを取り上げています。今の段階で私たちが考えていることをみなさんに分かりやすく伝えてみようというのが今日の講演会の趣旨です。

幸福に関する問い：社会科学における人間

はじめにいくつかの問いについてみなさんに考えてほしいと思います。

●そもそも本当の幸福とはなんだろうか。自分の幸福はどのように実現できるだろうか。

これはみなさんにとっても大きな問題でしょうし、ある意味では生きている人のひとりひとりの大きな課題です。ですから幸福論には一般の人たちからも非常に大きな関心が集まっています。そして社会科学の観点から見れば、

●ひとりひとりが幸福になるだけでなく、人々みんなが幸福になるような社会とはどのようなものだろうか。それはどのように実現できるのだろうか。

これも非常に大きな問いであり課題です。

さらに今日は「政治経済学における展開」というサブタイトルをつけていますが、どのような政治経済にすれば人々は幸福になるのだろうか。これもまた非常に大きな課題です。これからお話するように、幸福には古代から非常に大きな関心を寄せられてきましたが、このテーマを主題にして展開する社会科学は最近になって活発に発展しつつあります。

幸福は、人間の生き方と非常に深く関係する問題です。ですからこのテーマに関しては人間というものを考えざるを得ないのですが、実を言うと今日の社会科学ではあまり深く人間について考えていないことが多いのです。みなさんがいろいろな勉強をしていく中で、「人間とはどのようなものか、人間の生き方はどのようなものであるべきか」について触れている講義はそれほど多くはない。場合によっては大学で社会科学を学んでもそのようなことをほとんど考えずに卒業していくことになりかねないわけです。

本当の幸福とは何か

しかし幸福というテーマを正面に据えるとそうはいってられません。「人間とはどのようなものか、人間が幸福になるためにはどうしたらよいか」ということがもっと大きな課題となってくるわけです。それでは本当の幸福とは何だろうか。これは実は哲学的に大きなテーマです。

●お金でしょうか、健康でしょうか、地位ないし名誉でしょうか、あるいは何かの快楽、それ以外の生きがいや自己実現・充実などでしょうか。

この4つに分けて聞いてみましょう。みなさんはどれにいちばん幸福を感じるでしょうか。お金だと思う人？ それなりにいますね。健康だと思う人？

大体お金と同じ位の人数ですね。地位や名誉だと思ふ人？ 少ないけれども何人かいますね。それ以外の例えば生きがいや充実感、自己実現などだと思ふ人？ これがやはり多いでしょうか。最後のものがいちばん多いけれども、他の考え方を持つ人もいます。特にお金や健康の人は相当いるという様子ですね。

哲学の中には「本当の幸福などない」というニヒリズム的・虚無主義的な考え方もありますし、あるいは「何が幸福かはひとりひとり考え方が違うから、みんなにあてはまる正しい幸福については言えない」という主観主義的な考え方もあります。それとは反対に「これが本当の幸福だといえる」という考え方（客観的・間主観的）もあります。対話型講義でこの問題を扱うときには、正解はないけれども考え方を深めていこうとして議論していきます。

自分とみんなの幸せ：幸福についての公私関係

さて、先ほども少し言いましたが、「自分個人にとっての幸福なのか、それともみんなにとっての幸福なのか、そしてこの関係はどのようなものなのか」ということも大きな問題です。自分にとっての幸福とは、公と私の関係から見れば私的・個人的な幸福といえます。これに対してみんなに関わる幸福のことを公共的幸福ということもできる。公共哲学の観点から見れば、「公共的幸福とはどのようなものでそれを実現するためにはどうしたらいいだろうか」ということを考えていくこととなります。さらに「この関係はどうだろうか、自分の幸福を先に追求すべきなのか、それともみんなの幸福を先に追求すべきなのか、あるいはその関係はどちらが優先するというような問題ではないのかどうか」といったことも考えていく必要があります。

宮沢賢治の有名な言葉に、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉があります。これは、全体の幸福を先に追求すべきだという考え方です。社会科学では、このような考え方もしばしばあります。個人の幸福を考えるよりもやはり社会や政治経済をよくしないとイケないのではないかと、という考え方です。これらもやはり公共研究の課題となります。

幸福についての公共哲学

公共哲学や政治哲学の主な考え方を3つに分けて簡単に説明しましょう。福利型、自由型、美徳型の3つです。「福利型」でいう「福利」とは幸福と利益のことで、ひとりひとりが主観的に「これが幸福だ」と思う喜び・苦しみ（快楽）を基礎に考えます。この典型は、快楽を数量化できると考えて、それを全員分合計して考える思想で、功利主義というものです。ごく簡単に言うとひとりひとりの快楽の合計と考えれば分かりやすいと思います。

2つ目は「自由型」です。個人の自由な権利の行使、あるいは自由な選択を重視する考え方です。権利の中身に関して意見の違いがあり、リベラリズムやリバタリアニズムなどと呼ばれます。今はごく簡単に自由な権利を重視する考え方だと思ってください。

3つ目の考え方が「美徳型」です。コミュニタリアニズムという考え方に相当しますが、深い内面的な喜びに基づいて善い活動をすることによって喜びや幸福が来るという考え方とここでは理解しておいてください。今日私がこれから説明していくのは、この中の美徳型に相当する考え方とそれに関する研究ということになります。

アリストテレスの幸福観

この考え方は古代ギリシャのアリストテレスという哲学者などから始まります。彼は幸福をエウダイモニアという当時の言葉で説明していますが、「善き精霊」というのが言葉の元々の意味です。今では「幸福」とか「開花 (flourish)」と訳されます。人生の目的が善の実現で、それによって幸福がもたらされると考えたのです。ひとりひとりの魂の美徳や素質に則した活動によってその人の資質に則した幸福が現れる。今の言葉で言えば、本当の意味での自己実現によって幸福になるということになるでしょう。個人の生き方の問題を倫理学として考えて、その延長線上にポリスという当時のギリシャの都市国家における幸福を考えました。

今の言葉で言えば、これは大きな意味では政治学ないし政治経済学に相当し

ます。ですからアリストテレスは個人の幸福を考えて、それを起点にしながら全体の政治や経済の幸福を考えたわけです。そういった幸福は、短期的で瞬間的ないし刹那的な喜びではなく、もっと心の深いところで感じる持続的な幸福です。私は深い幸福（ディープ・ハピネス）と呼んだら分かりやすいと思います（第1図）。一時的で短期的な喜びを無視するわけではありませんが、いちばん基礎的なところには深い喜びがあります。本当の幸福というのは浅いものではなく深いものであり、ただ物質的に「何があるか」ということだけではなく、もっと内的な幸福が大事だと考えるのです。

第1図：ディープ・ハピネス
浅い幸福



(出典) 筆者作成

ただアリストテレスは外的・物質的なものも要らないと思ったわけではなく、一定の富や友人関係などがあってはじめて本当に善いことができると考えました。外的・物質的な幸福と精神的幸福の両方が必要だと考えたわけです。これを「総合的幸福」と言えるでしょう。けれども、往々にしてお金や外的なものだけを考える幸福の議論が多いので、内的なものも大事であり、それが原点であると考えたのです。それは、先ほど言ったように、継続するのです。

また個人だけではなく、ポリス・公共的な世界全体について幸福を考えていく必要がある。それは「コミュニnal（共同）な幸福」、あるいは「社会的幸福」ということができるだろうと思います。美德に関する古典的な哲学からはこのようなことを考えることができるわけですが、実はこういった考え方に非常に近いことを今では科学的な心理学が新しい研究として究めつつあります。それをポジティブ心理学と言いますが、その考えをごく簡単に説明します。

ポジティブ心理学とは何か

この心理学は2001年にマーティン・セリグマン（1942年生まれ）という人がアメリカ心理学会の会長だった時に提唱し、それ以来急速に発展しています。今までの多くの心理学は鬱などの精神病などにかかっている人がそ

から回復することを目指して、ネガティブな状態にある人を通常の状態に戻すことを考えてきました。これに対して、セリグマンは、「健康で良い心理状態というのはどのようなものなのか、またそうなるためにはどうしたらいいのか」という研究を提案しました。人々が幸福になったり、

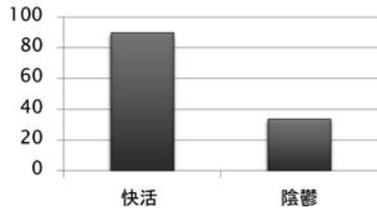
健康で成功して繁栄することを可能にするためにはどうしたらいいのかということの研究するわけです。それはポジティブな状態なので、それを中心に研究する心理学をポジティブ心理学と呼びます。

セリグマンは科学的な心理学の研究者ですから、この心理学では実験をして統計データを分析して、どのような傾向があるかということをつまららかにします。原因と結果の関係を科学的・統計的に考えるということです。結論としては、心の状態がポジティブ（積極的・明るいなどのプラスの状態）だと、それが原因となって良い結果、つまり幸福が生じるということで、これをいろいろなデータで明らかにしています。

いちばん有名なものは、ポジティブな感情の効果です。有名な古典的な研究では、幸福感が寿命にもたらす影響が明らかになりました。180人の修道女が見習いの時代に書いた文章から調査をしました。すると85歳のときに最も快活だったグループは90%生存したのに対して、最も快活でなかったグループは34%しか生存していませんでした。グラフに両方の割合を示してあります（第2図）¹。

この研究がなぜ古典的に有名か説明しましょう。修道女の人たちは基本的に同じようなライフスタイルで同じようなことをしているわけです。もちろんその人がどう生きるか、どのような環境にいるかということに寿命は大きく影響され

第2図 幸福感の寿命への影響
生存



(出典) 筆者作成

¹ マーティン・セリグマン『世界でひとつだけの幸せ』（アスペクト、2004年）、第1章。

るわけですが、同じような状況の中で暮らしている人の中でこれだけ大きく寿命が違ってくるということは、感情が寿命に影響したのではないかという推定が成り立つわけです。このように、いくつかのグループを作って、そのグループの間での相違についてデータを分析することによって統計的な研究を行います。

このような研究がその後数多く行われ、例えばミネソタ州の精神科医の調査では、40年前に治療を受けた精神科の患者839人の中で2000年までに200人が死んでいました。ところがその中で楽観主義者と悲観主義者を比較すると、楽観主義者の方が19%長寿だったというのです。受診した時に楽観主義だったか悲観主義だったかということを調べて、それが40年後に実際にどれだけ寿命に影響したかということを調べたのです。

ポジティブな感情の効果

このような調査の結果、「幸福感を持っているか持っていないか」、あるいは「楽観主義的か悲観主義的か」ということは健康や寿命に大きく影響することがわかりました。例えば癌などの病気になったときの回復力にも差があります。健康だけではなく仕事への影響もあります。セリグマンがアメリカの生命保険会社であるメトロポリタン生命で実験をしたところ、入社時に楽観度が上位半分の外交員の方が下位半分の人より会社を辞める率は半分で、20%多く契約が成立しましたし。上位4分の1の人では下位4分の1の人よりも50%も多く契約が成立しました。外交員が契約を取るには心理的に大変な部分があるから、楽観主義的な人の方が成功しやすいのでしょうか。入社時に楽観的な人の方が契約に成功する確率が高く、さまざまな問題が生じてもがんばって仕事を続ける傾向が高いわけです。逆に非常に悲観的な人は、減入ったりやる気がなくなったりする人がいるだろうと思いますが、実際に調べてみても、仕事を辞めてしまったり、契約の成功率が低いのです²。

このようなデータがいろいろとあり、学業にも影響があることがわかってい

² マーティン・セリグマン『オプティミストはなぜ成功するか』（講談社文庫、1994年）、第6章。

ます。楽観的な人と悲観的な人、前向きな人と後ろ向きな人を比べるとやはり、学業の成績も違うのです。30年後にどのくらい収入に違いがあるかを見てみると、これにも影響があります。そのように人間の心の状態が実は長期的には寿命や健康、仕事や収入などに影響を与えることが分かってきました。

ポジティブな感情というのは、「楽観主義や喜び、感謝、安らぎ、興味、希望、誇り、愉快、エキサイトしたり鼓舞されること、畏敬、愛」などです。この反対がネガティブな感情です。一日の中で「自分の感情がどのくらいポジティブになっているか、どのくらいネガティブになっているか」を考えてみましょう。「明るい気持ちでいるパーセンテージが今日は多かった、昨日は少なかった」などいろいろな時があると思います。このポジティブな感情とネガティブな感情の比率を調査します。すると「ポジティブな感情の比率が高いと、その人の知的な関心が広がりますし、頭や心の働きがよくなる」ということも実験から分かりました。ですから学業や仕事においてもポジティブな感情を持つことが大事なのです。

さまざまな感情についてそれぞれこういった研究がなされているわけですが、その中の親切な行為・愛について例として紹介しましょう。例えば被験者のグループに、週に一度親切な行為をしてもらい、その後に幸福度を調べると、そうしないグループの人たちよりも幸福度が高まりました。また被験者のグループにボランティア活動をしてもらって、そうはしない普通の人たちと比べると、ボランティア活動をした人たちの方が鬱状態は少なくなって幸福が高まりました。お金を渡して、あるグループの人たちには他の人のためにそれを使ってもらい、もうひとつのグループには自分のために使ってもらいます。すると、他に人のために遣った人たちの方が幸福度が増すという結果になりました。

このような実験によって、親切な行為をする利他的な人の方が他の人との繋がりが多く幸福になるという傾向があるということが分かってきました。今日お話したのはごく一部の結果ですが、これらによって感情が幸福度に大きく影響することが分かってきたのです。

「幸福をもたらすものは何だろうか」という初めの問いに戻りましょう。「お

金だ」という人もいましたね。おもしろい研究として、宝くじで非常に多くのお金が入った場合に、この幸福感はどのくらい続くかについて調べたものがあります。実はこの幸福感はあまり長期間続かないのです。中には、宝くじで非常に多くのお金を得た結果、逆に不幸になってしまったという人もいます。自分のしっかりとした仕事の結果として儲かったというのは別ですが、偶発的にお金が儲かっても、必ずしも幸福になるとは限らないのです。ですから、美德型の思想から見ると、やはり善い生き方をすることが必要だと考えるわけです。

美德・人格的強みと幸福・良好状態

そこでこの心理学では世界中のさまざまな地域でどのようなことが美德や人格的な強みと考えられているかを調べて、以下の6つはほとんどの地域で美德と考えられているということが分かりました。「知恵・知識や、勇気、愛・人間性、正義、節制、精神性（スピリチュアリティ）・超越性」です。美德型の思想から言えば、こういった美德を身に着けることが、先ほど言ったポジティブな感情に繋がり、幸福に繋がるわけです。美德と言えは今では道徳的な意味が強いですが、これらの特質は人格的な強み・自分の強さとも言われます。

そして、幸福を科学的に調べるために、最近では「良好状態 well-being」という概念を使うことが多くなっています。それを計測するために、セリグマンは5つの指標を挙げています³。第1は、先ほど述べた「ポジティブな感情 (positive emotion)」です、第2は、「没入・没頭 (engagement)」です。仕事にせよスポーツにせよ、無我夢中になって没頭する。これはやはり幸福感につながります。第3は「ポジティブな人間関係 (positive relationship)」を形成することで、友人・知人・家族などとの良い関係を持つことです。第4は、人生や仕事に「意味 (meaning)」を感じることです。何か自分よりも大きなことのために貢献しているという感覚です。第5は、仕事や活動の「達成感 (achievement)」です (第3図)。

³ マーティン・セリグマン『ポジティブ心理学の挑戦』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2014年)、第1章。

これらのものが良好状態を測るための指標になるだろうというのです。お金や成功を得ることは達成感につながりますからこれも確かに幸福には役立ちます。一般の人はこれだけで考えている場合が多いのですが、幸福感を調べるとこの要素だけでなく他の要素も大事なのです。先ほども言ったように、高い収入があれば幸福になるとは限りません。

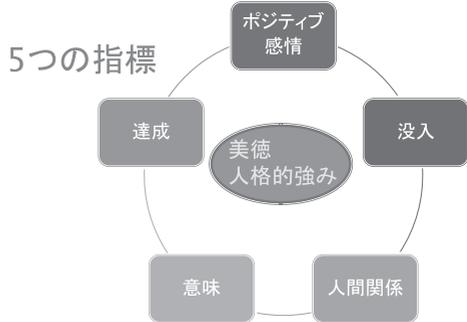
さすがに「生きていけるか生きていけないか」という状態ですと、収入があった方が幸福になります。一定程度までは収入があった方が幸福感が増えます。しかし、その水準を超えると、もっとお金持ちになっても幸福感が増えるとは限りません。たとえば、良い人間関係を持っていたり、人生や仕事に意味を感じていた方が、幸福感は高まるのです。この場合も収入は若干は幸福感に関係しますが、幸福になるためにはお金だけでは不十分だということが分かります。これはアメリカ国内で調べても、国際的に調べても同じでした。

活動への没頭や没入というのは、無我夢中で行う創造的な仕事や活動のことで、これをフローの体験と言います。仕事の他、スポーツ、思想、芸術、趣味などいろいろな活動で起こります。

人生の意味も大事で、自分個人を越えて人々や世界のために役立っているという感覚がある方が幸福につながるのです。逆に自分のしていることに意味を感じなくなると、絶望感に襲われたり無気力になったりします。甚だしい場合は、自分が生きていることに意味がないと思って自殺したりすることもあるのです。

友人やパートナーとの人間関係に関して、おもしろい実験をひとつ紹介します。朝4時に電話をして悩みを打ち明けられる相手がいるかないかで分けて、

第3図 良好状態（ウェル・ビーイング）



(出典) 筆者作成

寿命との関係を調べると、そのような相手がいる人の方が長生きする傾向が高い。ですから、信頼できる人を持っている人の方が幸福になる傾向が高いのです。収入が高くてお金を持っているからと言って、人間関係が良いわけではないこともわかっています。

美德型のポジティブ公共哲学と幸福の政治経済学

このような科学的研究は現在急速に発展中です。これまでは思想的に「善き生」と考えられてきた内容が、今や科学的・実証的にも明らかになりつつあるわけです。これまでは哲学と科学とはいわば対立するものと考えられることが多かったのですが、ここにおいてはその2つが架橋され結びつきつつあると言っていていいでしょう。

冒頭にお話しました個人と社会との関係から言えば、今まで紹介したのは個人の研究です。政治経済学を考えた場合には、これが政治経済学にどのように関係するかを考える必要があります。個人がどんなにポジティブな感情を持って幸福感が高まったとしても、例えば経済的に衰退したり恐慌が起こったり、あるいは戦争が起こったりすると、幸福感を維持することは難しい。そこでこの心理学にとっても、個人の幸福感と政治経済のマクロな状況との関係をどう考えるかということが大事なテーマになってきています。マクロな心理学的考察が必要なのです。

今までの多くの公共哲学では、例えば国家で独裁者が現れたり、人権が阻害されるというようなネガティブな状態を想定して、「それをどのように阻止するか、そのようなことが起こらないようにするためにはどうすべきか、起こってしまったらどうするか」という研究の方が、どちらかというとき多かったのです。これはネガティブな状態を防止するための公共哲学ですから、「ネガティブ（防止型）公共哲学」と言えるでしょう。

これに対して「美德型の公共哲学」ではむしろ、「そのコミュニティや国家でより良い状態を実現するためにどうするか」を中心に考えます。この「良い状態」をしばしば「共通の善」の実現と言っています。これはポジティブな状

態の実現を目指す公共哲学ですから、「ポジティブ公共哲学」と言えます。

ネガティブ防止型の公共哲学は、国家の干渉から個人の自由を守るので「自由型」の思想（自由主義）です。ロックがその典型でしょう。これに対して先ほど名前を挙げたアリストテレスや近代の理論家ではルソーなどは、どちらかというとなポジティブな状態を実現させるためにはどうすればいいかということ考えたので、その思想はポジティブ公共哲学だったと言えます。このような思想家たちは美德や共通善を重視する傾向が強いのです。ネガティブな状況の防止とポジティブな状態の実現という両方とも大事なので、私は両方の観点を統合する必要があると考えています。ただこれまで前者の方が優勢だったので、ポジティブな方向にも注目していく公共哲学が大事だろうと思うのです。

実は経済学でも幸福についての研究は進展しています⁴。みなさんも経済学の指標で GNP（国民総生産）や GDP（国内総生産）などを聞いたことがあると思いますが、最近ではそれ以外にいろいろな指標が開発されています。お金だけでなく他のものを計測していく必要があるのではないかと考えられ始めているからです。例えばブータンという国が非常に注目されています。この国では国民総幸福量（GNH）という指標が提案され、4つの要素（良い統治、持続可能な社会経済的発展、文化保護、環境保護）から幸福を考えてそれを増やしていくことが国家の目標とされています。これが世界で一番幸福な国なのではないかと注目されているのです。

また政治哲学の方でも注目されている人ですが、ノーベル賞受賞者の経済学者アマルティア・センなどの議論がきっかけとなり、人間開発指数（HDI）というものが提案され世界銀行などで使われています。指標として、保健や教育、所得を調べるものです。今までのようにただお金の量だけを見るのではなく、他の要素も入れて総合的に状況を見て、その上で経済政策を考えていこうとするのです。

さらに人間の暮らしに着目して、「よい暮らし指標」（BLI）も提起されてい

⁴ 友原章典『幸福の経済学』（創成社、2013年）、第2・3章。

ます。OECD 諸国では、「住居、収入、雇用」などの物質的な側面と同時に、「コミュニティ、教育、環境、政治参加、健康、生活満足度、安全、ライフワークバランス（仕事と生活のバランスをどう取るかという問題）」からなる「生活の質」も調べています。また小川哲生先生が研究されているようなソーシャル・クオリティという指標も開発されています。

それから国民総幸福度指標（NHI）というものも提案されています。先ほどお話しましたポジティブ心理学の創設者セリグマンや他の有名な幸福の研究者たち（エド・ディーナー、セリグマン）が、先ほどお話しした主観的な幸福度も入れて幸福について調べようという提案をしています。このように、お金などの客観的指標と同時に心に関係する主観的指標も入れて総合的に幸福を考えていこうという提案も、近年活発になされています。これは「総合的指標」と言えるでしょう。

どのような指標を取るかによって変わってくるがありますが、基本的には経済の状況は幸福度に影響します。インフレや所得低下、失業などが激しいとやはり幸福度は低くなりますし、所得が大きくなると幸福感は高くなります。政治の方でも自由民主主義が実現していて、政治的な自由や経済的な自由、個人的な自由が高いほど、やはり幸福度が高いという関係が見出されています。またスイスの研究では直接民主主義という、人々が直接に政治に参加する仕組みがあった方が幸福度は高いということもわかりました。このように政治や経済のシステムも幸福に影響を与えることが分かってきたわけです⁵。

ポジティブ社会科学とポジティブ民主主義

実際に南オーストラリア州の州都アデレード市では、セリグマンらを招いて先ほど言ったような幸福の指標を使って本格的な調査を行い、それを公共政策に活かそうという試みが始まっています。政治学の研究（ロバート・パットナムら）では、「信頼がどのくらいあるか」を社会的（関係）資本と言ってそれ

⁵ ブルーノ・S・フライ『幸福度をはかる経済学』（NTT出版、2012年）、第13・14章。

を計測し調べることによって、信頼感が高い地域の方が民主主義は良く機能しているということが明らかになりました。ポジティブ心理学者の1人（ジョナサン・ハイト）は、社会心理学の研究として「政治の道徳的基礎」を研究し、先ほど言ったいろいろな政治哲学の類型にどのくらい支持者がいて、それを支持する人はどのような心理的傾向を持っているかということ調べました。人間の心理と政治哲学の考え方の関係を研究したわけです⁶。

これらの実証的研究は政治学や経済学のフロンティアであると思っております。このような「ポジティブ社会科学」が発展していくと思うのです。

特に政治学について言えば、先ほど言ったように民主主義は、これまでネガティブな独裁や専制を抑止するという観点から考えられてきました。民主主義には古代から衆愚政や専制に陥る危険が指摘されてきました。戦後の政治学の最大の課題は、ファシズムの経験から学んで同じようなことが起こることを避け、自由民主主義を確立することでした。そのために立憲主義や三権分立といった考え方や制度が必要とされています。その点は今後も変わらないでしょう。

ただ民主主義においては、人々が有権者として政治家を選出しますから政治が良くなるか悪くなるかは、一般の有権者の意識に大きく左右されるのです。公共的な美德を持って政治に積極的に関心を持ち政治に関わる人が多ければ多いほど、より善い政治家が選ばれて、より善い政治を実現する可能性が高まります。先ほど言いましたように直接民主主義も幸福度に寄与することが分かっていますので、公共的な美德を持っている人たちが政治に直接参加する可能性が広がれば、これもまた幸福度に寄与するということになります。

その結果は、より良い政治に繋がっていくでしょう。ですから、民主主義を質的に向上させていくには、公共的美徳に基づいて人々が政治に参加して政治を決めていくことが大事です。政治思想ではこれは共和主義と言われます。そういった考え方が強まっていけば、民主主義の質は高まっていくでしょう。それは「質的民主主義」とか「美德型民主主義」とも言えるでしょう。美德が重

⁶ ロバート・D・パットナム『哲学する民主主義』（NTT出版、2001年）、ジョナサン・ハイト『社会はなぜ左と右にわかれるのか』（紀伊國屋書店、2014年）。

視される民主主義です。

それによって民主主義がポジティブな政治を実現していくことが可能になります。これを「ポジティブ民主主義」と呼びましょう。今の段階ではこれは主として、幸福の公共哲学という観点からの思想的な議論です。ポジティブ心理学や幸福についての政治経済学が進展すれば、ポジティブ民主主義についても仮説が立てられ、それが科学的に検証される方向に今後発展していくのではないかと私は思っていますし、私たちのプロジェクトもそういった方向に寄与できれば嬉しいと思っています。

人文社会科学のパラダイム転換——ポジティブ政治経済学に向けて

不幸を避けるために戦争や独裁、恐慌や不況などのネガティブな現象を回避するということが、従来の政治学の最大の問題意識でした。しかしそれと同時に今後は、人々が幸福になるような、より優れた政治経済を実現することが目標となるでしょう。これを目指すのが「ポジティブ政治経済学」です。そして個々人が健やかで幸せな社会、つまり個々人が幸せであると同時に社会全体が健やかで幸せになることを目指すように展開していくのではないかと思います。たとえば個々人についてのポジティブ心理学の科学的成果に立脚して、健やかで幸せな社会の実現を考えていくことが可能になるでしょう。

冒頭に言ったように、今までの社会科学では人間についての議論が少なかったわけですが、ポジティブな社会を実現するためにはやはり「人間はどうあるべきか、どう生きるべきか」という考察を社会科学の原点にする必要があります。美徳型の公共哲学からは「善い生き方とはどんなものなのか、そして幸福とはどのようなものなのか」ということが最重要な問題です。それを初めに考えて、その上で経験的に研究することによって、新しい社会科学が発展していくのではないのでしょうか。

これは、今後の人文社会科学のパラダイム転換に繋がっていくのではないかと私は思っています。「美徳型の公共哲学」に基づいて経験的に研究を進めることによって「美徳型の公共研究」が進展していくことを期待しています。も

しこれが実現すれば、哲学と科学とを統合するような新しい人文社会科学が誕生することでしょう。

みなさんとしては、学問的な進展もさることながら、みなさん自身が幸福になり、幸福な社会の形成に寄与するということが大きな課題になると思いますので、こういった研究も念頭に置きながら幸福や善き生き方なども意識しながら政治経済学を学んでいってほしいと思います。